

2021

NO.42

MEIJO UNIVERSITY
NEWS

名城大学 総合研究所

Dynamic-Interface

人・環境・未来に貢献する学術プロジェクト



Message



総合研究所 所長
原 脩

総合研究所 NEWS (第42号) の発刊にあたって

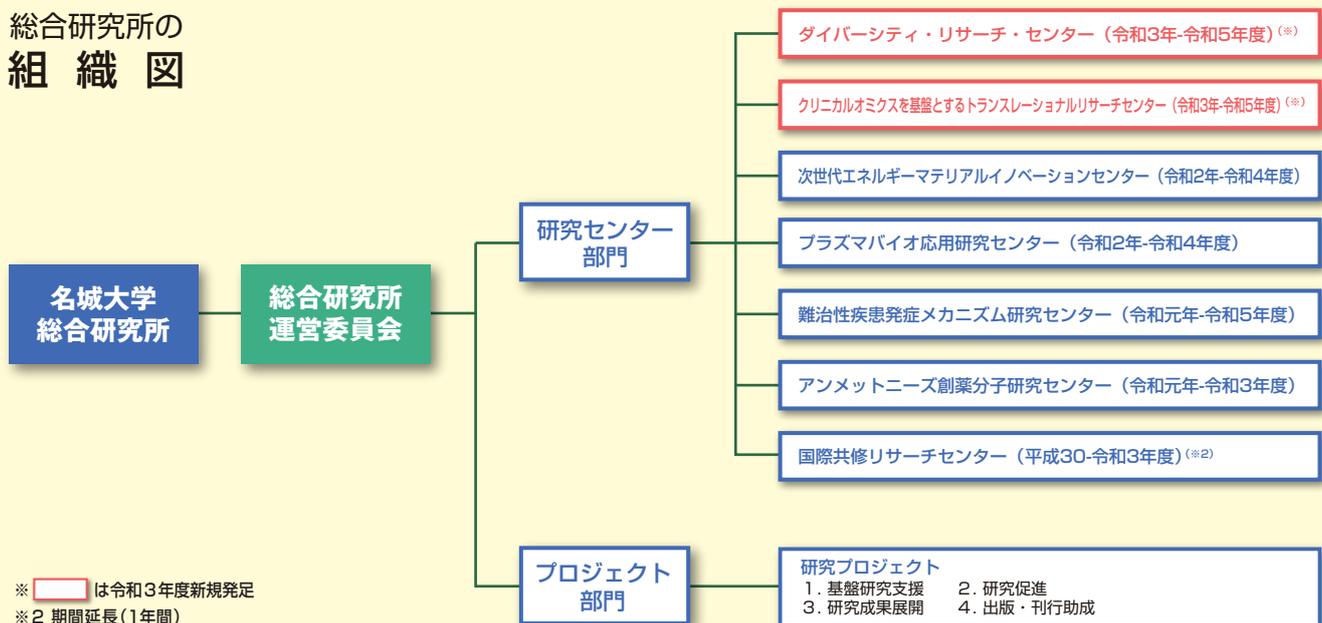
名城大学総合研究所は、名城大学の専任教育職員相互または学外の研究者との共同研究を推進し、もって学術文化の進歩発展に寄与するために1994年4月1日に設置されました。以降、①研究および調査、②研究・調査の成果に関する広報、③研究会、交流会および各種講座等の開催、④学術研究奨励助成制度に関する事項、⑤その他目的達成に必要な事業、を取り扱い、現在250名を超える所員とともに研究事業を展開しています。

総合研究所では研究事業の展開とともに、その広報活動の一環として、当NEWSの発刊を行っております。このNEWSでは、総合研究所の行事や活動、研究センターや所員の研究紹介を掲載し、活動の情報発信を行っております。また紀要および論文集を発刊し、所員の研究・調査の成果を広く世に広めております。

その一方で研究成果などを地域社会に還元するため、公開講演会を開催しています。例年、年2回開催しており、令和3年度の前期は、4月15日に学術研究支援センター、総合企画部、社会連携センターと合同で特別講演会「燃料電池自動車MIRAI開発者講演会」開催しました。講師としてお招きしました吉田耕平氏(トヨタ自動車(株)トヨタZEVファクトリー商用ZEV製品開発部部長)からは、燃料電池自動車「MIRAI」の技術開発の歴史、および、水素社会実現に向けたトヨタ自動車の取り組みに関する講演をいただき、大学人にとっても貴重な時間となりました。後期には「名城大学新型コロナウイルス研究プロジェクトシリーズ」として、令和2年度新型コロナウイルス研究プロジェクトに採択された本学薬学部神野透人教授と打矢恵一教授に新型コロナウイルス研究に関してご講演いただく予定となっております。この講演会においても多くの方にご参加いただけることを楽しみにしております。

最後に総合研究所では、所員に対し学術研究奨励助成制度を設けており、総合大学の特色を活かし、文系・理系の分野を問わず学際的共同研究や高度な学術研究を推進するために、全学的な立場からプロジェクト部門と研究センター部門からなる時限的研究を支援するもので、自由な研究活動を活性化させ、外部資金の獲得に繋がるよう個人およびグループ研究を応援しています。本学専任教員は、研究課題を申請することで所員になることができます。学術研究活動の更なる発展や国際連携・研究拠点形成の実現に向けて、この総合研究所を上手く活用していただければ幸いです。

総合研究所の 組織図



令和3年 4月15日

● 名城大学特別講演会を開催

総合研究所、学術研究支援センター、総合企画部、社会連携センター合同で、4月15日(木)、天白キャンパス共通講義棟北の名城ホールで、名城大学特別講演会「燃料電池自動車MIRAI開発者講演会 カーボンニュートラルに向けたトヨタの取り組み」を開催し、本学教職員、学生及び愛知総合工科高等学校専攻科の学生ら約250人が聴講しました。講師は、トヨタ自動車株式会社の吉田耕平トヨタZEVファクトリー商用ZEV製品開発部長と折橋信行同部主査・担当部長で、「FCV開発の歩みとカーボンニュートラルに向けて」と題してFCV(燃料電池車、Fuel Cell Vehicle)の仕組みからコンセプト、進化の足取りなどを解説しました。吉田氏はさらに、環境問題、経済対策の両面から脱炭素化施策への期待が高まっているという時代背景を説明し、「SDGs(持続可能な開発目標)に向けた挑戦が始まっている」と力説されました。



参加者から、開発をやり遂げる原動力について質問があり、折橋氏は「少しでも世の中の役に立ちたいということ」と答え、吉田氏は「技術開発チームの仲間と一緒にゴールを目指す充実感と感動」を挙げられました。

総合研究所の年間スケジュール

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
総合研究所紀要の発行	名城大学特別講演会開催 総合学術研究論文集の発行				NEWS(前期)発行	総合研究所公開講演会開催(後期)	研究センター中間報告会開催	学術研究奨励助成費の募集	総合学術研究論文集・紀要の募集		学術研究奨励助成費の審査・決定	NEWS(後期)発行 研究センター(3年目)最終評価

令和3年度 名城大学総合研究所

学術研究奨励助成制度課題採択者一覧表

令和3年度の「学術研究奨励助成制度」の採択者、研究課題が学内の「学術研究審議委員会」において「独創性・新規性・妥当性・社会性・計画性・実施体制」等の総合的な判断により決定されました。

1. 研究基盤支援事業費

内容 本学専任教員が、科研費をはじめ学外の研究助成(学外競争的資金)獲得のための準備段階の研究で、個人の研究を対象に助成する。

助成額 500千円以内/件(20件以内/10,000千円を限度)

2. 研究促進事業費

内容 本学専任教員が、募集対象の年度(令和3年度)に、科研費に研究代表者として、より発展をめざす研究計画で申請を行ったが、採択に至らなかったものの審査結果が「A(上位20%)」又は「B(上位20%~50%)」を対象に助成する。(研究分担者を伴うグループ研究を含む)

助成額 700千円以内/件(15件以内/10,500千円を限度)

3. 研究成果展開事業費

内容 本学専任教員が、科研費(継続を含む、延長を含まない)又は学外競争的資金に研究代表者として採択された評価の高い研究であって、募集対象年度(令和3年度)に採択事業の最終年度を迎え、今後いっそう飛躍が期待できるものを対象に助成する。ただし、科研費等の採択課題毎に1回の助成とする。

助成額 1,000千円以内/件(10,000千円を限度)

4. 出版・刊行助成事業費

内容 学術的に価値が高い研究成果で、通常の出版が困難である本学専任教員の単著又は共著(本学専任教員のみ)で刊行予定のものであり、本大学に蓄積された、豊かな学術活動の成果を社会に公開するための学術書・教科書・啓蒙書等の出版・刊行を対象に助成する。

助成額 1,500千円以内/件(2件以内/1,500千円を限度)

5. 研究センター推進事業費

内容 本学専任教員の複数名からなる研究グループの行う、①最先端レベルの研究プロジェクト、②学際的な共同研究事業、③研究分野に優れた業績のある教員との共同研究事業について、学内審査により研究拠点(研究センター)として承認されたプロジェクトを対象に、3年間又は5年間助成する。

助成額 ① 助成額5,000千円以内/件 助成期間 5年 } 各1件以内
② 助成額6,000千円以内/件 助成期間 3年 }
③ 助成額3,000千円以内/件 助成期間 3年 }
*①および②年目以降の助成額は前年度の8割を限度とする。
*②の助成額は、助成期間中均等とする。

◆ 研究基盤支援事業費 ◆

番号	学 部	職 名	代表者氏名	研 究 課 題	金額(千円)
1	理 工 学 部	教授	成塚 重弥	リモートエピキタシーを用いたマイクロチャンネルエピキタシーの品質向上	500
2	理 工 学 部	教授	丸山 隆浩	カーボンナノチューブ配向膜を用いた水質浄化用サプナノろ過膜の開発	500
3	理 工 学 部	教授	景山 伯春	実験室進化による淡水性シアノバクテリアの耐塩性化とゲノム解析	500
4	理 工 学 部	教授	土屋 文	リチウム複合酸化物セラミックスを用いた二酸化炭素回収および隔離システムの開発	500
5	理 工 学 部	准教授	赤堀 俊和	高酸素含有による生体用β-Ti合金の高強度・高延性同時発現機構の解明	500
6	理 工 学 部	准教授	神藤 定生	光合成細菌によるCO2を資源とするバイオエチレンの高生産	500
7	理 工 学 部	助教	本田 真己	カロテノイドの効率的な異性化を可能にするフローリアクターの開発	500
8	農 学 部	教授	松儀 真人	反応媒体の疎水性チューニングを基点とする触媒の配座制御と活用型反応群の開発	500
9	農 学 部	教授	日野 輝明	小哺乳類の遺伝的解析と地理情報分析に基づく河川による分断化と連結化の評価	500
10	農 学 部	准教授	奥村 裕紀	培養細胞に対するニフトリZPIの細胞機能調節機構の解析	500
11	農 学 部	准教授	濱本 博三	藻類由来の高分子を利用したソフトマター型反応媒体の設計	500
12	薬 学 部	教授	神野 透人	呼気中の健康マーカーの探索に向けた揮発性有機化合物分析法の開発	500
13	薬 学 部	教授	永松 正	糖尿病性腎症の発症機構の解明 ACAA 処置メサンギウム細胞培養液中のポドサイト障害ペプチドの探求	500
14	薬 学 部	准教授	岡本 誉士典	第2世代脂質メディエーターによる神経膠種の薬物治療耐性能の獲得	500
15	薬 学 部	准教授	加藤 美紀	実験動物からヒトへの外挿可能性の向上を目指したマルチキナーゼ阻害薬の解毒機構における動物種差の解明	500
16	薬 学 部	准教授	間宮 隆吉	性ホルモン合成シグナル活性化によるひきこもり予防	500
17	薬 学 部	助教	植田 康次	糖尿病とセレン:酸化ストレス-バランス制御の乱れによる発症機序の検討	500
18	薬 学 部	助教	吉見 陽	臨床薬理遺伝学的解析によるクロザピンの薬効・副作用発現に関わる遺伝子の同定	500
19	都市情報学部	教授	稲葉 千晴	杉原千畝のヴィザ発給とアメリカ・ユダヤ組織のユダヤ難民支援	500
合計					9,500

◆ 研究促進事業費 ◆

番号	学 部	職 名	代表者氏名	研 究 課 題	金額(千円)
1	経 済 学 部	教授	勝浦 正樹	世帯属性による家計消費・生活行動の因果構造に関する実証的研究	700
2	理 工 学 部	准教授	鈴木 秀和	超多接続した次世代IoTデバイスの効率的情報交換基盤の設計	700
3	理 工 学 部	教授	太田 貴之	大電力パルス変調スワッチによるアモルファスカーボン膜の硬化メカニズムの解明	700
4	理 工 学 部	准教授	才田 隆広	酸化チタンナノシートの酸素還元反応に対してN ₂ ドープが与える影響	700
5	理 工 学 部	助教	山崎 彬人	パーソナルモビリティを対象とした搭乗者の視認対象物の可視化	700
6	理 工 学 部	教授	葛 漢彬	延性破壊モデルの高性能鋼材への適用性に関する研究	700
7	理 工 学 部	教授	溝口 敦子	実河川への適用を視野に入れた土砂流送過程の計測と流砂量評価モデルの構築	700
8	農 学 部	教授	津呂 正人	環状モノテルペンを生産するキンギョソウの作出	700
9	農 学 部	准教授	塚越 啓央	側根の出現を制御している力学変化を調節する転写ネットワーク	700
10	農 学 部	教授	湊 健一郎	食用キノコ中βグルカンによるマクロファージ分化調節機序の解明と炎症性疾患治療への展開	700
11	薬 学 部	教授	小田 彰史	アミノ酸変異が薬物代謝酵素の分子認識に与える影響についての構造バイオインフォマティクス解析	700
12	薬 学 部	教授	丹羽 敏幸	計数調剤機能と嚥下補助機能を有するキセロゲル小球製剤の製剤設計	700
13	薬 学 部	教授	湯川 和典	統合失調症様プレキシN1欠損マウスにおけるPVニューロン減少の成因に関する研究	700
14	薬 学 部	助教	青木 明	ショウガ科生薬による褐色脂肪細胞におけるミトコンドリア機能に対する影響評価	700
合計					9,800

◆ 研究成果展開事業費 ◆

番号	学 部	職 名	代表者氏名	研 究 課 題	金額(千円)
1	理 工 学 部	教授	堀田 一弘	Deep Learning を用いた動画像中の周期識別と根拠解析	1,000
2	理 工 学 部	助教	今井 大地	窒化物系混晶半導体における光・熱放出過程の観測に基づく発光効率向上策の提案	1,000
3	薬 学 部	准教授	坂井 健男	ジビニルアンモニウム合成におけるC5R(CN) ₄ 抽出法の活用と連続反応への展開	1,000
4	薬 学 部	准教授	根岸 隆之	重金属化合物と脳-アストロサイトがつくるグルタチオンの功罪-	1,000
5	薬 学 部	助教	西川 泰弘	N-アセチル化アミノ糖に対する位置選択的修飾法の開発	1,000
合計					5,000

◆ 出版・刊行助成事業費 ◆

番号	学 部	職 名	代表者氏名	研 究 課 題 (書名)	金額(千円)
1	法 学 部	教授	柳 勝司	受任者の忠実義務	1,019
2	外国語学部	准教授	鈴木 裕輔	清沢満之における宗教哲学と社会	1,148
合計					2,167

◆ 「研究センター推進事業費」【新規】 ◆

番号	研究代表者	研 究 セ ン タ ー 名	金額(千円)
1	薬 学 部 教授 柳澤 聖	クリニカルオミクスを基盤とするトランスレーショナルリサーチセンター	6,000
2	法 学 部 教授 近藤 敦	ダイバーシティ・リサーチ・センター	3,000
合計			9,000

◆ 「研究センター推進事業費」【継続(2年目)】 ◆

番号	研究代表者	研 究 セ ン タ ー 名	金額(千円)
1	理 工 学 部 教授 内田 儀一郎	次世代エネルギーマテリアルイノベーションセンター	4,800
2	理 工 学 部 教授 伊藤 昌文	プラズマバイオ応用研究センター	3,000
合計			7,800

◆ 「研究センター推進事業費」【継続(3年目)】 ◆

番号	研究代表者	研 究 セ ン タ ー 名	金額(千円)
1	薬 学 部 教授 山田 修平	難治性疾患発症メカニズム研究センター【事業期間:5年間】	3,200
2	薬 学 部 教授 原 脩	アンメットニース創薬分子研究センター【事業期間:3年間】	3,840
合計			7,040

◆ 「研究センター推進事業費」【継続(4年目)】 ◆

番号	研究代表者	研 究 セ ン タ ー 名	金額(千円)
1	外国語学部 教授 西尾 由里	国際共修リサーチセンター	1,000
合計			1,000

令和3年度 名城大学総合研究所 学術研究奨励助成制度 採択研究紹介

研究センター部門



ダイバーシティ・リサーチ・センター

研究代表者 法学部 教授 近藤 敦

- 令和3年度 研究センター発足
- 令和3年度 学術研究奨励助成制度 研究センター推進事業費採択

ダイバーシティ・リサーチ・センターは、国・自治体・企業の多様性に関わる、日本と諸外国における政策・法令・判例・学説を比較分析し、ダイバーシティ社会を実現するための法制度の検討を目的としています。憲法と労働法と人権諸条約との整合的な解釈に配慮しながら、ダイバーシティ法制の背後にある人権規範を考察する基礎研究をベースとします。また、国・自治体・企業レベルのマイノリティの社会参加の状況を評価します。さらに、移民統合政策指数、インターカルチュラル・シティ指数、ジェンダーギャップ指数、多文化共生推進計画、男女共同参画基本計画、障害者基本計画、高齢社会対策大綱なども比較検討する予定です。そのうえで、具体的な課題に応じた政策や法制度のあり方を考察します。とりわけ、差別禁止法制の比較考察を通じて、差別禁止法案を提言し、今後の日本における国と自治体と企業におけるダイバーシティのあり方の展望を示します。

これまでも、「国籍」等を理由とする労働条件の差別を禁止する労働基準法3条、女性に対する賃金差別を禁じる同法4条があり、男女雇用機会均等法、年齢に関わりない採用を求める雇用対策法10条や高齢者等の雇用の安定等に関する法律、障害者雇用促進法、女性活躍推進法など、ダイバーシティを実現するための法規は整備されてきました。にもかかわらず、日本企業におけるダイバーシティは、どちらかというとな男女差別の問題だけに焦点があてられてしまう傾向にあります。近年、国会では障害者差別解消法、ヘイトスピーチ解消法が制定され、LGBT法案が提出されているように、本格的なダイバーシティ法制の整備は、これからの日本における喫緊の重要課題であり、その法理念と法制度の研究が求められています。

ダイバーシティ・リサーチ・センターは、「ダイバーシティ法学」の聖地といえます。ダイバーシティ法学とは、国籍や民族、性別や性的指向、年齢や障害の有無などの異なる人々が、互いのちがいを認め、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていくダイバーシティ社会を築くために不可欠な法制度

のあり方を検討する学問研究を意味します。本研究は、日本と諸外国における国、自治体、企業のダイバーシティ政策の異同を比較分析し、外国人、民族的少数者、女性、性的少数者、障害者および高齢者の権利保障と社会参加のあり方を具体的に検討する予定です。

本研究を通じて、日本の法制度の国際比較に見る課題とそれへの処方箋を見出すことが期待されます。研究代表者は、法務省の在留外国人の基礎的調査、総務省・愛知県・名古屋市・可見市・安城市・春日井市・田原市・小牧市・西尾市の多文化共生推進プラン、愛知県・名古屋市の人権施策の策定に参加し、実際の国や自治体の施策のあり方を検討しています。自治体の条例やプラン、国の差別禁止法など、本研究の成果を実際の政策や法制度に活かすことをめざしています。また、これまで、Migrant Integration Policy Index、Global Citizenshipなどの国際的な比較研究に参加しながら、日本の法制度の特徴を国際的に発信してきました。CNN、BBC、ロイター通信、フランス通信社などの海外メディアからもたびたび取材を受けました。

ダイバーシティ・リサーチ・センターの研究は、研究代表者や研究分担者がこれまで取り組んできた研究を発展させるものです。本研究は、より広い視野から、女性、性的少数者、障害者、高齢者の社会参加の問題との異同を考察しながら、具体的な差別禁止法およびダイバーシティ社会の実現に向けた法制度のあり方を検討します。憲法学、労働法学、国際人権法学に限らず、移民政策学、多文化共生学、障害法学、ジェンダー法学などを踏まえた最先端の学際的研究によるこうした幅広いダイバーシティの多角的な研究は、国内外においてありません。とりわけ、伝統的に多様性の乏しい日本にあっては、今後のダイバーシティ社会の形成に向けて本研究センターの裨益するところは大きいものと思われれます。

名城大学 総合研究所

令和3年度 学術研究奨励助成制度・研究センター推進事業費
ダイバーシティ・リサーチ・センター
Diversity Research Center at Meijo University

センター代表者 近藤 敦 (法学部)

**ダイバーシティ・リサーチ・センター(DRC)は、
ダイバーシティ社会をめざします。**

ダイバーシティ法学とは、**国籍や民族、性別や性的指向、年齢や障害の有無などの異なる多様な人々の社会参画を実現するダイバーシティ社会のために、ダイバーシティ法学の基礎研究をベースとします。**
そのうえで、日本と諸外国における異同を比較分析し、**多様な人々の権利保障と社会参加を具体的に検討する応用研究を行います。**

5つの柱

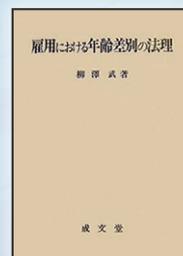
外国人・移民の権利と社会参加

女性の権利と社会参加

性的少数者の権利と社会参加

高齢者の権利と社会参加

障害者の権利と社会参加



組 織

センター代表者：近藤 敦 (法学部)

研究分担者：植木 淳 (法学部)、柳澤 武 (法学部)、河北洋介 (法学部)



名城大学

令和3年度 名城大学総合研究所

学術研究奨励助成制度 採択研究紹介

研究センター部門



クリニカルオミクスを基盤とする トランスレーショナルリサーチセンター

研究代表者 薬学部 教授 柳澤 聖

- 令和3年度 研究センター発足
- 令和3年度 学術研究奨励助成制度
研究センター推進事業費採択

1981年から約40年間死因別死亡率の第一位を占め、2019年には37.6万人の方が亡くなっている「がん(悪性腫瘍)」。その中で死亡者数の最も多い肺がんをみると、その数は1年間に75,400人(2019年)で、罹患者数の8割以上の方が亡くなっています。これらの数字を見るだけでも、がんの治療がどれほど難しいものであるかが分かります。

ゲノム(遺伝子“gene”と、集合を意味する“-ome”を組み合わせた造語で、生物の持つ遺伝情報の総体を指します)に生じた複数の異常が複雑に組み合わせたり、がん細胞は無秩序に分裂を繰り返しながら増殖し続け、全身へと広がっていきます。がんの発症や進展機構の解明を目指した研究の礎は、疾患モデル細胞や限られた数の症例から供与を受けた臨床検体を用いて、機能的関与が推察される分子一つ一つを対象に、増殖・浸潤・転移能、或いは薬剤耐性などががんの根治を困難にさせる本質的な特性獲得に、それらの分子がどの様に寄与しているのかを個別の事象として捉えることで築かれてきました。すなわち、がんの分子病態の一部分を垣間見ることにより、がん全体を理解しようと試みてきたわけです。このような断片的な、しかしながら継続的な知見の蓄積によって、がん発症・進展に関わる分子に対する理解は進み、現在では、遺伝子変異の蓄積により自律的な増殖能を獲得し、免疫システムによる排除機構からののがれ、血管新生などにより周囲の微小環境を整え、浸潤・転移を繰り返して多臓器の機能不全を引き起こすメカニズムなどが明らかとなってきています。これまでの研究成果の積み重ねにより、一部の白血病、肺がんや乳がんなどに対しては、発症メカニズムに基づいた分子標的治療薬(疾患の原因となる特有の標的分子をねらい撃ちする治療薬)が開発され、2000年代に入って臨床への応用が実現してきていますが、その治療対象となる症例数は限られており、これら分子標的治療の対象とならない症例に関しては、1970年代からその治療法に大きな変化は認められていません。

その一方で、質量分析装置、次世代型シーケンサーなどの機器の登場により、分析技術は大きな進歩を遂げ、網羅的な

生命情報であるゲノム、エピゲノム、トランスクリプトーム、プロテオームデータなど(これらはオミクスデータとよばれます)の取得が可能となりました。このような分析技術を背景に、個人の遺伝子情報を短時間、かつ低コストに取得可能なパーソナルゲノム時代の到来が目前に迫っており、臨床試料を用いたオミクスデータの取得「クリニカルオミクス」を大規模に推進し、画期的な分子標的治療薬、診断薬、予防法の開発へと昇華させることに大きな期待が寄せられています。

名城大学トランスレーショナルリサーチ(TR: Translational Research)センターでは、名大病院、愛知医科大学病院と緊密に連携する3つの研究拠点を設置し、「がん診療」に関連した詳細な臨床情報の附帯する血液、あるいは病変組織など多様な臨床試料を解析対象の中心として、「クリニカルオミクス」を推進していきます。がん診療では、有効性の確認された抗がん剤や近年長足の進歩を遂げる分子標的治療薬を用いた「がん治療」を行って、疾患の治癒あるいはその進行を遅らせることだけではなく、科学的にも有用性が証明された治療開始前の早期から導入する「緩和療法」、さらには治療に際して必発である副反応(副作用)に対する「支持療法」を適切に行い、全人的苦痛の軽減に可能な限りの策を講じることが極めて重要となります。我々は、各リサーチグループで取得したオミクスデータを最大限に活用して、がんをシステムとして理解することにより、新たな治療標的の探索だけでなく緩和・支持療法に関わる分子機構の解明など、がん医療のシームレスな開発研究を展開しています。二人に一人ががんで亡くなり、年間死亡者数が40万人を超える時代は間近に迫ってきています。がんシステムの鍵を握る分子群を同定し、がんの発症・進展や副反応発現の分子病態などを動的・静的機構の両面から捉えることによって、革新的な分子標的治療薬、先進的な診断法や薬効・副反応出現の高精度予測法開発の基盤研究を進めていき、精度の高い「オーダーメイド(最適化あるいは個別化)医療」の確立に貢献したいと考えています。

名城大学 総合研究所

令和3年度 学術研究奨励助成制度・研究センター推進事業費

クリニカルオミクスを基盤とする トランスレーショナルリサーチセンター

Clinical OMICs and Translation Research Center

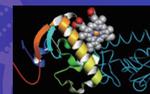
センター代表者 柳澤 聖

臨床試料を最大限に活用したオミクス解析により
がん診療のシームレスな最適化を目指します



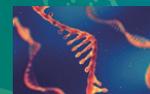
がん治療最適化リサーチグループ

- ・小細胞肺癌に対する分子標的薬開発基盤研究
- ・非小細胞肺癌に対する治療の有効性を判別する分子診断法開発基盤研究



がん緩和療法最適化リサーチグループ

- ・がん緩和療法に関わる因子の探索研究
- ・疼痛性障害に関わる因子の探索研究
- ・精神疾患に関わる因子の探索研究



がん支持療法最適化リサーチグループ

- ・がん支持療法の最適化に関わる因子の探索的研究
- ・分子標的薬を含む抗がん剤の最適投与設計を可能とする分子診断法開発基盤研究



組織

薬学部：柳澤 聖、近藤梨沙(腫瘍分子医学研究室)、野田幸裕、吉見 陽(病態解析学 I)
築山郁人(病態解析学 II)

学外分担：長谷哲成(名古屋大学医学部附属病院)

「紀要」と「総合学術研究論文集」の発行

紀 要 第26号 目次

◇研究報告

わが国自動車産業集積の構造と動態

— EVシフトの影響と対応 —

田中 武憲

スマートグラスのための片手による文字入力

田中 敏光, 柴田 侑里, 佐川 雄二

ブロックチェーンとvCPEを用いた次世代ネットワークアーキテクチャの基礎的検証

鈴木 秀和, 加藤 宏理

プラズマオンチップ

— 低温大気圧プラズマで細胞を制御するマイクロデバイス —

熊谷 慎也

2眼カメラのアンサンブル平均と空間輝度分布によるローリングシャッター可視光通信のシンボルレート向上

中條 涉

グラフェンナノウォールの核発生メカニズムに関する考察

平松 美根男

電力系統の需給計画のセキュリティチェックと計画修正

— 大規模電力系統のブラックアウトを避けるために —

益田 泰輔

蓄電池システムと火力機による需給計画・運用手法の開発

— 電力系統の柔軟性を確保するために —

益田 泰輔

シンクロトロン放射光を用いた グラフェン直接成長その場X線回折測定

檜尾 達也, 中島 諒人, 後藤 隆明, 阿知波 良介, 上田 悠貴
丸山 隆浩, 成塚 重弥, 高橋 正光, 佐々木 拓生, 藤川 誠司
次世代航空機用Ti-5Al-2Sn-2Zr-4Cr-4 Mo 合金(Ti-17)の
ミクロ組織と疲労寿命の関係

赤堀 俊和, 田中 沙季, 新家 光雄

窒化物系混晶半導体薄膜のサブギャップ領域における 光吸収過程解析手法の構築

村上市 裕人, 今井 大地, 豊田 隼大, 宮嶋 孝夫, 久保 寿敏
酸化ロジウムからなる二次元構造体の創製

— 酸化ロジウムナノシートの合成 —

才田 隆広, 神野 亜美香, 増山 美優, 鈴木 大介, 丸山 隆浩
顕微ラマン分光法によるポリカーボネートの偏光測定

天野 竜太, 東海 博央

光干渉断層法(OCT)を用いた生体組織における毛細血管血流速度マイクロ断層可視化

佐伯 壮一, 古川 大介

培養温度シフトによる耐塩性シアノバクテリアが含有する抗酸化物質の蓄積誘導

景山 伯春

チェイランサス形質転換体の作出

水野 智子, 森垣 聡志, 津呂 正人

酵母育種技術を活用した大学ブランド純米吟醸酒の開発研究

— 愛知県奨励酒米品種「夢吟香」と愛知県オリジナル酵母の利用 —
後藤 実和, 松本 萌奈実, 家田 明音, 志水 元亨, 加藤 雅士
低温乳酸発酵を施した筋原線維の加熱ゲル形成に関する研究
— 特にタンパク質化学的变化について —

林 利哉, 長澤 麻央, 小川 幸彦, 芳賀 聖一

糸状菌由来の新規多糖分解酵素の探索とその機能解析

鈴木 裕満, 加藤 雅士, 志水 元亨

藍藻由来多糖類“サクラン”が抗酸化物質変化に与える影響

— フェノール性抗酸化物質質量測定における検討 —

濱本 博三, 田中 美穂, 戸川 景太

ストレス誘導性脳機能障害モデル動物の確立

川北 朗広, 林 利哉, 長澤 麻央

スリランカ水圏生態系におけるPOPsの動態解析

吉田 綾乃, 大浦 健

ニホンジカの個体数減少にともなう 森林環境と土壌動物相の変化
立石 涼帆, 竹島 由夏, 瀧本 愛華, 日野 輝明

空間認識における内的参照点と外的参照点

安原 和也

*Mycobacterium avium*感染症の抗菌薬に対する抵抗性の解明

打矢 恵一, 伊藤 沙樹, 飯嶋 那弓

ヒアルロン酸ゲルを用いたNSAIDs徐放性膝関節腔内注射剤の開発
岡本 浩一, 奥田 知将

ヒトの腸管内分泌細胞で発現する苦味受容体に関する研究

森 葉子, 青木 明, 岡本 誉士典, 神野 透人

[2.2]パラシクロファン骨格を有するC₂対称型面不斉二重水素結合供与触媒の合成と評価

北垣 伸治, 霜 依莉子, 武田 紗和, 本山 大夢, 早川 千尋

吉田 圭佑

ACAAを取り込んだメサンギウム細胞の培養上清はポドサイトのフットプロセスの発現を抑制する

永松 正, 杉本 真里

クリニカルプロテオミクス解析による新規腫瘍マーカーの探索

— 悪性胸膜中皮腫におけるOSF2発現の異常 —

柳澤 聖, 近藤 梨沙

脳梁発達初期の正中線道標形成と大脳縦裂リモデリングにおけるプレキシニン受容体の役割

小嶋 亮太, Md.Mosharaf Hossain, 都築 孝允, 根岸 隆之

湯川 和典

胎生期の免疫活性化によって仔マウスで誘発される行動異常の世代間継承

衣斐 大祐, 中齋 玄紀, 平田 明里, 間宮 隆吉, 高羽 里佳
平松 正一

ピペットチップ固相抽出法を用いた迅速・簡便な血清エストロゲンの抽出

岡本 誉士典, 青木 明, 神野 透人

模擬肺液中での自己組織化 siRNA/脂質ナノ粒子の物性・機能

奥田 知将, 岡本 浩一

神経細胞における分子シャペロン Osp94 による微小管輸送の機能制御の解明

小島 良二

ジフェニルアルシン酸によるヒト小脳由来アストロサイトの異常活性化

— 影響感受性におけるヒト・ラットでの種差 —

根岸 隆之, 佐々木 翔斗

マウス脂肪前駆細胞3T3-L1の褐色化に対する Cinnamaldehyde の影響

青木 明, 岡本 誉士典, 神野 透人

β -ヒドロキシアミド選択的アシル化反応の開発

西川 泰弘, 亀澤 友紀, 竹本 昂平, 松井 孝美, 森口 翔平

原 脩, 堀 裕奈

自閉スペクトラム症に対するレベチラセタムの影響に関する検討

守屋 友加

有機分子触媒によるスピロクロマン化合物のエナンチオ選択的構築法

吉田 圭佑, 高尾 賢一, 北垣 伸治

統合失調症患者とフェンシクリジン連続投与マウスにおける遺伝子発現解析

吉見 陽, 肥田 裕丈, 北垣 伸治, 尾崎 紀夫, 野田 幸裕
高等学校における不適応予防・改善をめざした「かかわりの力育成プログラム」の開発

曾山 和彦

総合学術研究論文集 第19号 目次

◇学術論文

屋敷林残存状況からみる散居集落の地域差

佐藤 布武

麹菌 *Aspergillus oryzae* の MorA 高発現株を用いた清酒の成分分析

高橋 泰志, 伊東 昂希, 三井 俊, 志水 元亨, 加藤 雅士
光ピンセットのための理論的補正法: バルクや基板表面近傍におけるコロイド粒子間の平均力ポテンシャルの取得

天野 健一, 鈴木 理香子, 高須 円香, 岩城 光宏

酢酸分子によるアスパラギン残基の脱アミド化の触媒機構探索 — 酢酸分子と水和水の間の水素結合の役割 —

仲吉 朝希, 加藤 絃一, 鰐田 皓太, 栗本 英治, 小田 彰史
現代スコットランドにおけるエスニック・マイノリティの発見

— 1985年以降のSEMRU (Scottish Ethnic Minorities Research Unit) を事例とする反レイシズム運動に関する予備的考察 —

加藤 昌弘

The Characteristics of US Naval Strategy Towards Japan in the Second Decade of the 20th Century

堅田 義明

総合研究所のご紹介

1. 総合研究所とは

平成6年4月1日、「学際的共同研究の推進」「専門領域を超えた多様な人材交流」
「研究成果の社会への還元」を目的として設立しました。

2. 総合研究所「所員」になるには

本学専任教員が研究課題を申請することで、所員になることができます

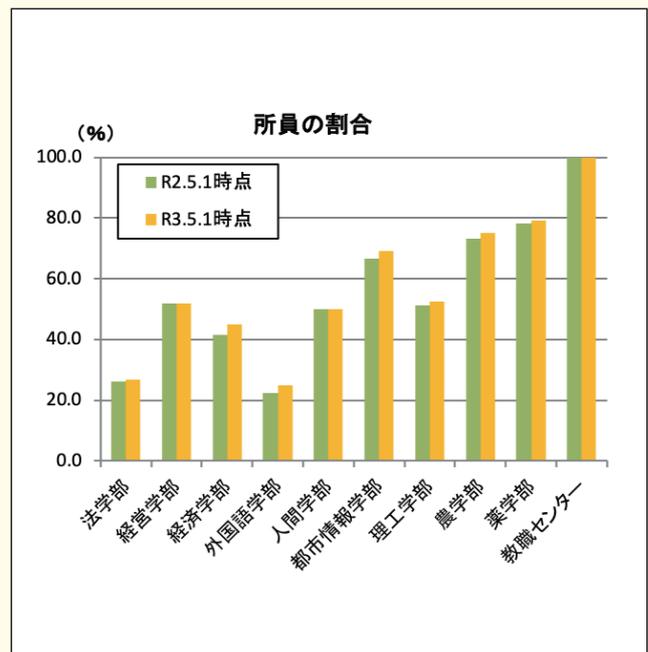
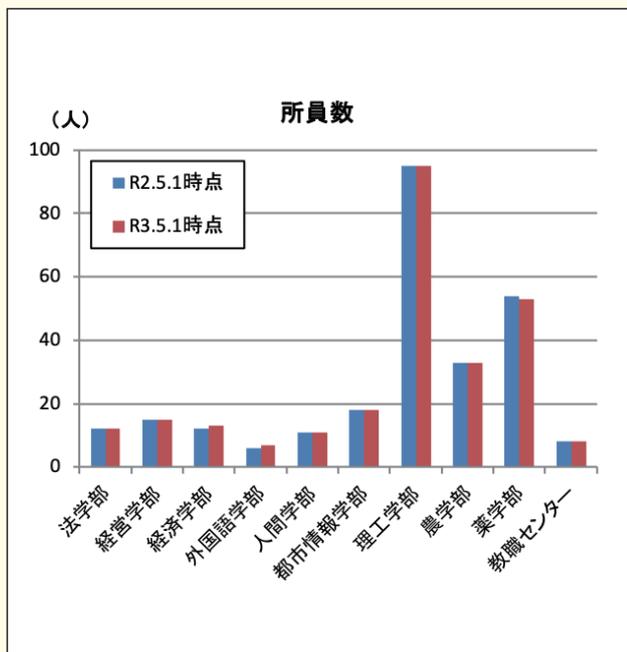
(学外者・非専任教員は、「研究員」になることができます。)

- ・申請は随時受け付けております。
- ・一度登録すると、申出がない限り退職するまで継続されます。

★所員になるメリット

- ① 学術研究奨励助成費の申請・獲得ができます(審査あり)。
- ② 研究センターを設置することができます(審査あり)。
- ③ 総合学術研究論文集・紀要へ投稿できます。

3. 学部別の所員数と割合 (令和2年度・令和3年度)



名城大学総合研究所

〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1丁目501番地
TEL(052)832-1151 FAX(052)833-7200